

「第二菟蓐本」と上州

市川祥子

1

泉鏡花「第二菟蓐本」⁽¹⁾は大正三年（一九一四）一月「新日本」に発表された。

物語は、小説家であろう俊吉が牛込矢来町の自宅二階で懐かしい染次に逢うところから始まる。俊吉は、染次の紅の長襦袢ばかりで置炬燵に丸まる姿を訝しがらず、打ち解けた様子を嬉しく思う。緋縮緬の色は、その姿での来訪を伝えられ、降りしきる雪を衝いて帰りを急ぐ道すがらも彼の目に浮かんでいたものである。

「第二菟蓐本」は染次の『緋の長襦袢』の物語⁽²⁾と呼ばれる。それに倣い、緋の色に注目しつつ、作品をたどっておきたい。

俊吉は、染次とはそれが最後になった、去年の八月末のことを思い出す。浅草の小さな芸妓屋から抱えて出た彼女は、目の眩むような暑さの中を披露にまわったと言う。しきたりで長襦袢は緋縮緬、汗で化粧が崩れ洋傘を持つ手が滑った、と。俊吉は雪の中で、女が夏の待合で苦労を打ち明ける姿を、そして炎天下に緋縮緬を纏って歩く姿を思い浮かべている。

染次は無理をして洲崎の廓を出、千葉で芸者となった。そこで彼女に入れ上げた男は、呉服屋の身上を潰し妻子を捨てた。二人で洲崎へ戻り引手茶屋を始めたものの続くはずもなく、男とは切れ「大川を深川から、身を倒し浅草へ流着い」て再び芸者となった。俊吉とは洲崎での馴染み。染次は、住み替える度に洲崎、浅草から便りをしたが、

俊吉は主ある者にとためらい、返事をしなかった。

俊吉は雪の辻へ出、あらためて浅草でのことを思い出す。彼は向島からの帰りに雨に遇い、電車の混雑を厭って浅草寺本堂の廂に宿った。そこで人懐かしさに引かれ、傘を借りるため、知らされていた染次の家へ向かった。ここまで俊吉は、晩夏の小雨にかすむ浅草の光景を「不思議に遙々と旅を」したよう、「旅路遙な他国の廓で」と感じている。そしてこの先へ進む様子は「九十九折なる抜裏、横町。谷のドン底の溝づたひ、次第に暗き奥山路」と表現される。浅草寺本堂の裏手は奥山と呼ばれる一帯。往時は興行の小屋が立ち並ぶ賑わいの中心地であったが、明治十年代後半に新設の第六区にそれらが移されてからは、「観音の後ろには、地獄の女が巢を構つて居る」「東京浅草の奥山には白首の艶魔が棲つて居て、緑の木の葉の蔽ふ軒端に偶に三味の音がする」とされるような町になっていった。「奥山路」はその地を歩くことであり、「九十九折」「谷のドン底」の喩えや、芸妓屋の御神灯を「狐火」とする表現は、深い山中を歩くかのような印象を与えている。

その空間で三年ぶりに二人は逢う。抱え主に隠れて次に逢うことを算段する染次は、既に洲崎での仲にかえったつもりでいようし、「湯あがりの水髪で、薄化粧を颯と直したのに、別しては又緋縮緬のお襦袢を召した処」という着替え姿を、「以前は着ものを着たより、其の方が多かつたぢやないか、私は些とも恐れやしないよ」と言う俊吉の心も同様だろう。狭い待合の、奥の間には青蚊帳に蒲団さえ敷かれた座敷で、染次は俊吉の膝にうつ伏す。昔の時間に戻るばかりというその時、隣の間の女房が「染ちゃん、お出ばなが」と声をかけた。洲崎の出の

身を侮るのだろうと、俊吉はちゃん付けで軽々しく呼び付けられた女の境遇を思い、自分もまた侮られたと感じる。そして、受け取った染次が元の座へ着こうとする時、盆は手から滑り、茶碗、急須に満たされたお茶が彼女の肩から胸へかかった。それは、蟬の羽にもたとえられる明石の着物を透って、緋縮緬の長襦袢に染みわたり、表に紅の色がにじむ。洲崎で俊吉の目に馴染んでいた色、二人の時間を象徴する色は、湿り気を帯びてさらに生々しく鮮やかに染次を彩る。しかし、次の瞬間には雑巾で拭くやら着替えるやらで逢瀬は頓挫し、見送られて帰った俊吉は、女の一張羅を弁償する金がないために再訪の約束も果たさず、上州伊香保に住み替えたとの便りにも返事をしていない。

雪の中で俊吉が思い出していたのは、夏に深山に分け入って懐かしい女に逢い、ぎりぎりのところまで進みながら、それでも深い情の淵に落ちることなく、例えば千葉の男と同じ轍を踏むことなく、戻って来られた経験である。場所は浅草寺、観音の加護に大きく与るのであらう。

帰った俊吉は、冒頭の姿に逢う。染次は伊香保での「酷い、情ない目」を語る。望みもしない「博徒」の旦那が付いて、その出す石段下の射的の店にいた。落ちぶれて訪ねて来た千葉の男を説き伏せて返す時、送りがてら湯に入ったのを旦那は怪しみ、嫉妬に逆上して彼女を殺した。

「短刀で、此、此処と此処を、彼方此方、ぎら／＼引かれて身体一面に血が流れた時は、……私、其の、たら／＼流れて胸から乳から伝ふのが、渴きの留るほど嬉しかった。莞爾々々したわ。何とも言へない可い心持だったんですよ。お前さんに、お前さんに、……あの時、——一面に染まつた事を思出して何とも言へない、いゝ心持だったの。此の襦袢です。斬られたのは、此処だの、此処だの、」

刺された胸から雪に注ぐ血は、浅草での濡れた緋縮緬と重ねられる。その紅は、最後には染次の死を彩る血の色となった。彼女は死を喜ぶ。

逢瀬を思い返す時間の内に、思いが俊吉に届かない以上生きようのない人生に決着がついたのである。俊吉宅二階の姿は、その夜ということになる。

と俊吉の瞞る目に、胸を開くと、手巾を当てた。見ると、顔の色が真蒼に成るとともに、垂々と血に染まるのが、溢れて、わな／＼指を洩れる。

俊吉は突伏した。

血はまだ溢れる、音なき雪のやうに、ぼた／＼と鳴って留まぬ。真つ蒼になって胸から血を流し続ける姿は美しく、恐ろしい。恐ろしさに俊吉は突つ伏す。染次が俊吉の前に姿を現したのは恋しさゆえだが、応える思いの強さを持たない身は、その姿の直視に堪えられない。やがて、お祖母さんが観音にあげるお経とともに染次の姿は消える。観音の加護により、染次は情念から解き放たれ、俊吉も一旦は救われた。

新聞の電報と、続いて掲げられた上州の記事は、こゝには言ふまい。俊吉は年紀二十七。

いかほ野やいかほの沼のいかにして

恋しき人をいま一目見む

この末尾は語り手の感慨だが、追って新聞の記事により伊香保で染次が殺されたと知る俊吉にも、この歌は想起されるはずだ。事情があつたにせよ便りに返事すら出さなかつた彼は、この時、「いかにして恋しき人をいま一目見む」なんとかしてもう一度逢いたいという染次の思いを真に理解する。それは、救われはしたものの、最後まで自分だけの誠実に閉じこもつた男に、責めるように突きつけられるのである。

2

「(略)——染や、今日はいゝ天気だ、裏の山から隅田川が幽に見えるのが、雪晴れの名所なんだ。一所に見ないかつて誘ふんで

すもの。

余り可懐しきに、うつかり雪路を上つたわ。(略)「

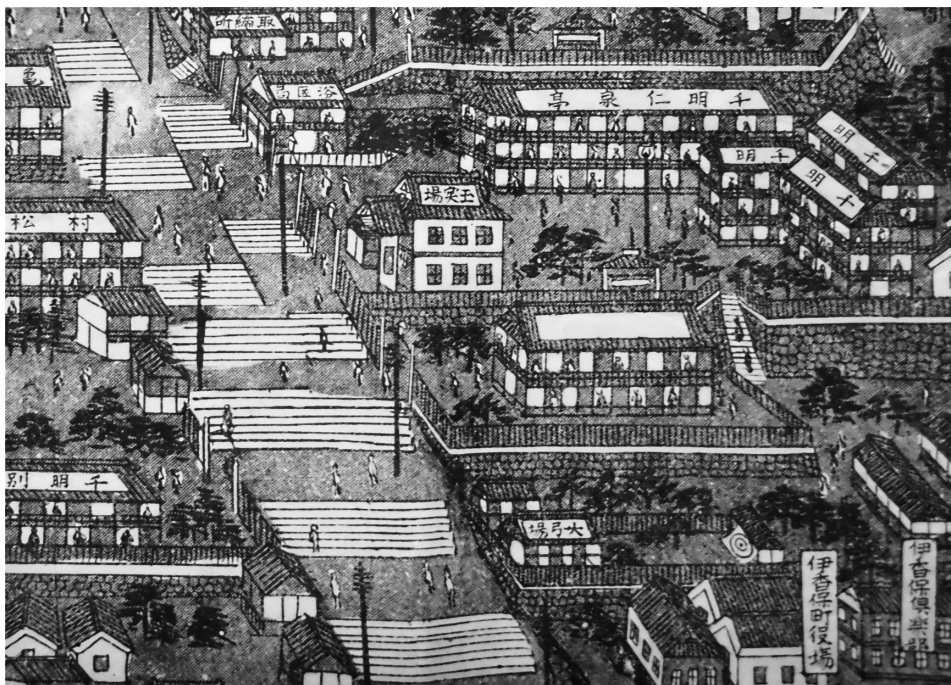
染次は「隅田川が幽に見える」と誘われ「余り可懐しきに」付いて行く。そこが俊吉との思い出の場所だからである。

実際の地理の上からは、伊香保と隅田川との取り合わせは奇妙に感じられる。東京から百キロ以上離れた伊香保の、千メートル程度の裏の山から、幽かにはいえ隅田川が見えるものだろうか。

伊香保は榛名山の東側斜面中腹に開けた温泉地である。温泉街には湯の沢の流れがあり、少し離れて榛名湖に発していくつもの滝を経て流れ落ちる沼尾川がある。東には裾野を広げた赤城山が聳え、二つの山の間には、銚子で太平洋に至る利根川が流れている。伊香保で川とあればこれらが拳がつて然るべきであり、秩父山脈に発し荒川から分かれる隅田川とは接点を持たない。

両者をつなぐのは案内記である。

大槻文彦『伊香保志』巻一(明15・6)には、「熊谷駅」に付した挿絵「熊谷堤」に「西北の山々を眺めて景色よろし北の方に伊香保の山も見ゆ」と書き込まれている。東京伊香保の道のりの半ば、上州に近づいた熊谷の堤に至って伊香保の山は見えるのである。一方、巻二で名跡を紹介した内、「水沢山」の項には「又浅間山ともいふ伊香保より東南一里水沢村の上であり此の山々の東北の端にありて殊に尖りて聳えたれば遠くより望むべし この山二ツ岳と共に東京九段坂又墨田川堤よりも見ゆ」とあり、田山花袋編『伊香保温泉誌』(明41・8)の「水沢山」の項にも「山端尖りて聳えたれば、二ツ岳と共に東京の九段坂又は隅田川堤より遙望し得べし」とある。ここでは隅田川から伊香保が見えている。ただし、後の田山花袋『伊香保案内』(大6・4)の凡例には「初めに、私は「伊香保案内」といふ小冊子を出したが、忙しいので、主として他の人がやったので、自分にも満足であり、土地の人にも気の毒であつたので、それで更に新たにこれを書いて見ることになつたのである」とあり、ここでの以前の『伊香保案内』が『伊



(図) 「上州伊香保温泉場真図」より

香保温泉誌』のこととすれば、これは多く他人の執筆によっている。東京より遙望の部分、文章の類似から『伊香保志』の記述を取り込んだと考えられる。著者たちにも確信があるわけではないだろう。

鈴木秋風『伊香保案内』(明44・7)の「水沢山」の項は「山の先が尖つて居るので、遠近から望見する事が出来る。東京の九段の辺(あたり)から見ると云ふ」と伝聞の形を取り、自身で書いたという花袋「伊香保案内」の水沢山の紹介も、「晴れた日には、東京の九段阪の上、もしくは隅田川の堤(き)あたりから、二つ岳と一つになつて見えるといふことである」と同様である。

このように隅田川から伊香保が、伊香保から隅田川が見えるという事象は、その地に立った者の実感としてではなく、案内記の上で作られ出されたものであった。鏡花はおそらく作品執筆までに伊香保を訪れていない。案内記を読むか伝え聞くかして、二つの場所を結びつけたと考えられる。また、伊香保を想像するにあつては温泉図も参照されたであろう。たとえば「上州伊香保温泉場真図」(明41・7)には、温泉街の最も特徴的な風景、その象徴である石段の坂の下方に、玉突場や大弓場の建物が見えている(図)。

末尾に置かれた「いかほ野やいかほの沼のいかにして恋しき人をいま一目見む」は「拾遺集」読み人知らずの歌であり「定家八代抄」などにも採られている。多くの案内記が載せており、『伊香保志』巻二には「伊香保の沼」の項の挿絵に「拾遺 伊香保のやいかほの沼のいかにして恋しき人をいまひとめ見ん 読人不知」が書き込まれ、和田稲積編『伊香保便覧』(明17・7)や『伊香保温泉誌』にもあり、後者には「(拾遺集)」と付してある。しかし、作品初出の「新日本」掲載時は「いかほ野やいかほの沼のいかにして恋しき人をいま一目見む―夫木集―」となつてゐる。自筆原稿、『遊里集』(大4・10)、春陽堂版『鏡花全集』巻九(大15・3)も同様である(『相台傘』(大3・7)は歌集名を付さない)。しかし、この歌は「夫木集」には採られていない。案内記では、物聞山を詠んだ伊勢の歌が「夫木集」にあることに必ず触れている。『伊香保志』巻二には「物聞山」の項に「夫木集の伊勢の詠によりて名高く今物聞山の時鳥を八景の一とす」に続いて「夫木集 いかほなる物聞山の時鳥にこらぬことに聞ゆるかな 伊勢」が

あり、『伊香保温泉誌』には物聞山の宮内省御用邸を紹介した後に「夫木集 いかほなる物聞山のほととぎすにこらぬことにきこゆるかな 伊勢」とある。『伊香保便覧』、島田齊胤『伊香保案内』(明39・4)、秋風『伊香保案内』にもある。これが「拾遺集」と混同されたのではないだろうか。

混同を促したと推測されるのは吉田東伍『大日本地名辞書』第四冊の下(明37・12)である。その「伊可抱嶺」の項には「伊加保呂に雨雲いつぎ可奴麻づくひととおたはふいざねしめこら」「伊香保風ふく日吹かぬ日ありと云へどあがこひのみし時なかりけり」「伊香保禰にかみななりそねわがへにはゆゑはなけどもこらによりてそ」「可美都気の伊可抱の禰呂にふるよきのゆきすぎがてぬいもがいへのあたり」「伊可保呂の蘇比のはりはらわがきぬにつきよろしもよたへとおもへば」が「(万葉上野国歌)」と出典を示しつつ引かれ、次に「いかほろやいかほの沼のいかにしてこひしき人を今ひと目見む、(拾遺)いかほなる物聞山のほととぎすにこらぬことにきこゆるかな、伊勢(夫木)」が続く。他と異なり、ここでは「拾遺集」と「夫木集」が並んでいる。これを実際に見たことが、「いかほ野や」の歌を「夫木集」と記憶させたのではないだろうか。

群馬県議会は明治一五年(一八八三)三月、全国に先駆け娼妓廃絶の建議を可決、同年四月には娼娼令が布告された。存娼勢力の抵抗は根強かつたものの、伊香保も影響を免れず、盛況を見ていた娼妓、妓楼について、齊胤『伊香保案内』は「同十六年六月娼娼の県令発せられて遂に其の隻影を止めざるに至れり」、『伊香保温泉誌』は「十六年六月娼娼の公達に従ひ今は全くその跡を絶つ」、秋風『伊香保案内』は「十六年に娼娼の令があつて、それから以後全く其跡を断つて了つた。今も伊香保の温泉宿の多くが、妓楼めいた建築に昔の名残を留めて居る」と、この地の風紀が改まったことを記している。ところが、『大日本地名辞書』には「伊香保」の項に「十六年六月に至り、群馬県管下都て娼娼の制と為りたり。(而も芸妓の公許あれば、其実は旧俗を改むるを

得ざる也」とあり、廃娼の建て前の裏で旧態依然であることを伝えて
いる。実態はさておき、博徒の情婦が射的場の店番をし、挙げ句に刺
し殺されるという作品の内容には、これの伝える雰囲気相応しい。
鏡花の目に触れた可能性を示すものだろう。

ここでは東歌五首に続いて「いかほ野や」の歌がある。東歌も恋の
歌であるが、実景に即し、伊香保特有の雲、風、雷といった自然を生
かして詠まれている。一方、「いかほ野や」の歌は「いかほ野やいかほ
の沼の」を「いかに」を引き出す序詞として用いる。その風景、自然
を思い描くこともない都人によつて、歌枕伊香保には「いか(に)」「
音だけが求められた。それにより、反復される「いか(に)」、つまり、
何とかしてもう一度逢いたいという思いのみが強烈に印象づけられ
る。東歌と並べて読む時、この歌の湛える情念は際立つてみえる。

こうして、伊香保の裏の山から幽かに見える隅田川とその遙望を期
待する人物、博徒が仕切る石段下の射的場という世界は形成され、そ
の地に纏わる歌の情念を核として作品は作り出されたのである。

自筆原稿では、他の多くの作品と同様、最初にひらがなの題名が記
され、それが消されて現在の題名になっている。「かいたうき」↓「第
二菟本」である。「かいたうき」は街道記だろうか海道記だろうか。
例えば、京から鎌倉へ下った紀行文である「海道記」¹⁵の著者は、駿河
の国遇沢に達した時、直前の承久の乱によつてこの地で斬られた中納
言藤原宗行の最期に思いを馳せて「況や馬嵬の道に出て牛頭の境にか
へらんとする涙の底にも。都に思ひおく人々や心にかゝりて。ありや
なしやのこの葉だにも。今一度きかまほしかりけん。されども隅田
川にもあらねば。言問ふ鳥のたよりにだにもなくて」と記す。これに限
らず、都を遠く離れた地で無念の死を遂げる者は、残した人々が心に
掛かり、もう一度安否を気遣う言葉だけでも聞けたらと思うものだろ
う。そして、後にその地に立つ者は、その思いを痛切に受け取る。そ
の人を知る時はいうまでもない。東京を遠く離れた地で殺された女の
思いを描いたこの作品が「かいたうき」と題されていたのはそのため

であろうし、街道とすれば中山道だろうか、東京と街道の果て伊香保
とをつなぐ世界が、その思いの、作品での展開を支えているのである。

3

大正二年(一九一三)十一月三日の「上毛新聞」¹⁶に殺人事件の第一報が
ある。

情夫を斬殺せんとし却て情婦が殺害さる

女は有名な浮気娘臨江閣のおてい

男は日赤支部病院内科医長本多操

一日午後六時廿分市内柳町一臨江閣留守居番高木庄八養女とい
(二九)が予て情を通じ居たる南曲輪町九五日本赤十字社群馬支
部病院婦人科医長医学士本多操(二九)の心変わりせるを怒り同人
を殺害して共に死なんと日本刀を携へて押入り背部より斬付けて
重傷を負はせたるも大格闘の末遂に肺部数ヶ所を突かれ却つて殺
害されたるの大惨劇を演出したり

操は夕飯を終り下女とく(三二)に寢床を延べさせて入浴に赴
かせ奥座敷八畳の間の北東に据へたる洋机に向ひ安楽椅子に凭り
て鏡花集を繙き絵日傘の四九九頁颯と開けた落花の逦々^{こみち}と凄
艶妍麗なる詞華読者を魅せんとする條を心静に読み耽り傍なる信
楽の大火鉢に炭を継ぎ居たる折しもあれ無言にて入来りしおてい
は予て覚悟なし来りてか羽織を脱捨てたる下には燃ゆるが如き緋
縮緬の襷十字に綾取り携へたる長さ一尺八寸の日本刀の鞘を払ひ
て突如操の右頸部に斬付け尚ほ頭に斬付けたるより操は驚きて倒
れながら組付き漸く刀を撈取りて立向ひ八畳の間を追ひつ潜りつ
なし居る間におていは左の乳の下に二ヶ所右の胸に一ヶ所を突か
れ操は右足の□を貫く創傷を負ひたれば血汐は迸りて凄□目もあ
てられずおていは尚ほも刀を握りて躍^{とどろ}狂^{くる}ひしも胸部の傷は深き
肺に達したる事とて遂に其場に倒れたり

事件は一月一日、操の下宿で起きた。心変わりを恨んだ貞は、緋縮緬の襷がけに日本刀の姿で操に斬りかかるが、逆に刀を奪われ殺された。刺されたのは左の乳の下に二ヶ所、右の胸に一ヶ所。肺の傷が致命傷となった。記事はさらに、前橋の社交場であった臨江閣の玉突場に操が通って親しくなったこと、貞の男性関係の乱脈ぶり、操は、親も認める仲でありながら、昔の恋人との復縁や親族の反対を理由に離縁を申し込んだことを伝えている。男女ともに不誠実な人物との印象を受ける。スキャンダラスな事件は関心を集め、挙式を待つばかりであったこと、貞に犯行後の自刃を覚悟した遺書があったことなどを伝えて、「殺人の令状執行 入院中の本多操に対して」(11・9)、「本多操は死せず 市中の風説は嘘也」(11・19)、「本多操予審終る 到底殺人を免かれず」(11・28)、「操の公判愈本日 近来の大公判たらんか」(12・15)、「お貞殺し本多操の公判 瞑目当時を追想し縷言糸の如し」(12・16)、「鬼気迫る夜の公判 兇行の有た時間頃操の罪は取裁かる」(12・17)、「操は懲役二ヶ年 二年間の執行猶予慰籍金は金七百円」(12・20)まで記事が続く。しかし、この事件は東京の新聞には報道されていない。

ここでは第一報に「鏡花集」の名があることに注目したい。貞が斬りかかったのは、操が「鏡花集を繙き絵日傘の四九九頁颯と開けた落花の逕云々と」を読んでいる時であった。実際に『鏡花集』第一巻は「絵日傘」を収め、四九八〜四九九頁の見開きは「物園のあたりをさして、颯と開けた落花の逕、小川が流れるやうに畝つた上を静々と通る一行の貴人」で始まる。「ちやうど此時、遙かに摺鉢山の方から推され、人波が左右に分れて、前後になだれて分れ、一條動物園の」に続く部分で、花見の混雑の中、シルクハットの男を前に夜会結びに蝙蝠傘のお民を後に、お姫様の一行が人の波を分けて登場する場面である。この場合、鏡花の読者であったことや「絵日傘」の内容が、操の人物を説明しているというわけではないようだ。『鏡花集』が開かれていたのは事実として、殺人事件の報道にこれが必要だったのかは分

からない。記者が文学好き、鏡花好きだけだったのかもしれない。しかし、この記事が何かの都合で当の鏡花の目に触れれば、大変な興味を引くことになるだろう。

「第二莨菪本」発表二ヶ月前のこの「上毛新聞」の記事には、上州前橋で、緋縮緬に彩られた女が胸を刺されて殺される姿がある。その光景が鏡花の想像力を刺激し、同じ上州の伊香保で女が殺され、「新聞の電報と、続いて掲げられた上州の記事」によってその死が知らされるという物語を構想させたのではないだろうか。

4

泉鏡花は明治三二年(一八九〇)秋から三六年(一九〇三)一月まで祖母・きて、弟・斜汀とともに牛込区南榎町に住んだ¹⁹⁾。矢来町の奥に当たる。牛込北町の友人の家から酒井の屋敷の森を見つづ帰る道筋は、実際のその地を思わせるものである。今、祖母はない。南榎町の家は、母のかわりに鏡花を育て、父のかわりに精神的な支えとなった祖母との思いの出の場所。「第二莨菪本」では、観音の加護とともに、それを導く祖母の慈愛にも俊吉は守られた。

ところで、雪の中を男が遊女に逢いに行くとなれば、「雪暮夜入谷畦道」²⁰⁾の直次郎と三千歳が思い浮かぶ。強請が露頭し逃亡を企てる直次郎は、入谷の蕎麦屋に寄り、近くの大口屋の寮で三千歳が養生していることを耳に挟む。手紙を言付けて忍び込み、二人は逢瀬を果たす。寮に下がっている身ながら三千歳は緋縮緬。彼女は「長く使りのないことなら、いつそのことにお前の手に掛け、殺して行つて下さんせ」と縋り、連れて逃げるか殺して行くかを願うが、いざ捕り手のかかった時、直次郎は足手まといだと振り切つて一人で逃げて行く。二人の別れが胸に迫る場面。しかし、女の願いは取り残されたままである。

野暮つたということだろう、酒の肴に狐蕎麦を詠えたことに「上州のお客には丁ど可いわね」と嫌味を言い、粹ということだろう、染

次が「てんのぬき」を嬉しがる「第二菟蓐本」のくだりは、直次郎が蕎麦屋に「おい、天麩羅で一合つけてくんねえ」「なけりやあ、たゞのかけでいゝ」と言い、自分の丑松が別れ際「天か玉子の抜きで呑むのも、しみつたれなはなしだから」と話す場面を連想させる。これに与つて俊吉宅二階での二人は、直次郎と三千歳のような、情夫と遊女との雰囲気を十分に湛えている。三千歳の「殺して行つて下さんせ」は、そのまま染次の心であつたらう。

作者の実人生に近い設定の中で描かれた染次の境遇、悲しみの向うには、三千歳はじめ廓に身を置いた全ての女性がいるのである。

注

- (1) 泉鏡花「第二菟蓐本」(「新日本」第4巻第1号、大3・1・1)
 (2) 松村友規「解説」(「化鳥・三尺角 他六篇、平25・11・15、岩波文庫) また、後述の「奥山路」の表現について、同書注「奥山路」は「山道深く迷い込んだイメーヅに浅草の奥山を掛ける」としてゐる。
 (3) 児玉花外「十二階の窓の眼」(「新小説」第17年第4巻、明45・4・1)
 (4) 注(2)はこの場面について、「上州伊香保の旦那に切り殺される末期のときに俊吉のもとを訪れた染次のまとう緋の長襦袢は、熱い茶を浴びたときの官能の愉楽に似た短刀の痛苦を代償にして、身体受苦からのがれ出た女の魂の姿である」としている。
 (5) 久保田淳「悪所と魔界——泉鏡花の『深川物』を例として——」(「国語と国文学」第70巻第11号、平5・11・1) は伊香保と隅田川の関係について、「この深川育ちの女は上州の山中で見える筈のない隅田川恋しさに、死地に赴いたのである」としている。
 (6) 大槻文彦『伊香保志』巻一〜巻三(明15・6・1、国文社、挿絵・長命晏春) 引用は『伊香保志』上・下(昭63・3・30、平元・3・30、みやま文庫)による。
 (7) 田山花袋編『伊香保温泉誌』(明41・8・25、伊香保温泉組合取締所)
 (8) 田山花袋『伊香保案内』(大6・4・3、日本温泉協会代理部)

(9) 鈴木秋風『伊香保案内』(明44・7・3、岸物産商店)

(10) 「上州伊香保温泉場真図」(明41・7・15、山田治衛門、写生画工・古耕) (図) は群馬県立図書館蔵のものを用いた。

(11) 和田稻積編『浴客必携 伊香保便覧』(明17・7、絵入自由出版社)

(12) 泉鏡花「第二菟蓐本」自筆原稿 慶應義塾大学図書館蔵

(13) 島田齊胤『伊香保案内』(明39・4・13、印刷・前橋印刷所)

(14) 吉田東伍『大日本地名辞書』第四冊の下(明37・12・29、富山房)

(15) 「海道記」 作者不詳 貞応二年(三三三)に京から鎌倉へ下つた紀行文。引用は「海道記」(続帝國文庫第24編「続紀行文集」所収、明33・9・4、博文館、著者を源光行とする)による。

(16) 「情夫を斬殺せんとし却て情婦が殺害さる」(「上毛新聞」(大2・11・3(月)第3面) 引用にあたりルビを取捨した。

(17) 記事はいずれも「上毛新聞」資料の欠号により翌年一月の紙面は未確認。

(18) 泉鏡花『鏡花集』第一巻(明43・1・1、春陽堂)

(19) 吉田昌志編『年譜』(「新編泉鏡花集」別巻2、平18・1・20、岩波書店)による。

(20) 明治三八年(二九五)二月二〇日没

(21) 「雪暮夜入谷畦道」 河竹黙阿弥「天衣紛上野初花」(明14・3)の内、「入谷村蕎麦屋の場」以降の直侍を中心とした上演に用いられる名題。引用は「天衣紛上野初花」(「黙阿弥脚本集」第13巻所収、大10・5・18、春陽堂)による。

※群馬県立図書館に「上州伊香保温泉場真図」の掲載をお認めいただいた。「第二菟蓐本」自筆原稿の閲覧にあたっては、慶應義塾大学三田メディアセンターに便宜をお図りいただいた。記して感謝申し上げます。
 ※「第二菟蓐本」の引用は岩波書店版『鏡花全集』により、ルビを取捨した。